高麗美術館
「活字の国、朝鮮ー朝鮮活字印刷文化との出逢いー」展

レファレンス課　中　尾　民　子

6月28日（木）午後近畿大学中央図書館。

かねてより高麗美術館から出展依頼があった、本学所蔵の「朝鮮時代木活字植字盤（族譜蜜蝋　19世紀）と、竹活字（3個）を搬出するために、美術館の方が二名来館された。木活字植字盤はエアーキャップに包まれ、活字は小箱に入れられ、その後大きな桐箱に収められて、二人がかりで乗用車まで運ばれ、美術館へと向った。

7月8日（土）高麗美術館。[古典籍研究会特別例会] 出席。

高麗美術館は京都市北区紫竹上岸町の静かな住宅地にあり、門前の大きな武官石像一対が、おおらかな面持ちで私を迎えてくれた。

今回、［古典籍研究会特別例会］に出席させていただいたおかげで、高麗美術館研究所の前庭で、館内見学の前のひと時、版木の刷りを体験することができた。

印刷実習では、付けすぎや、むらに注意しながら刷毛で版木に墨を塗っていきます。その上に和紙をピーンと伸ばしながら置きます。次にバレンで刷るのであるが、かなり磨り減った古い版木には、ヘチマを輪切りにしたバレンが馴染むということで、ヘチマで丁寧に刷っていくと、『春秋輯註』の一面がきれいに刷り上がった。いざ刷ってみるとかなりの力が必要で、何ページもきれいに刷り上げるためには、力と素早い動きと慣れが必要であると思われた。

今回は高麗美術館所蔵品を中心に、京都大学、個人蔵など約70点の朝鮮本、近畿大学所蔵の木活字植字盤などが展示されていた。高麗美術館特別研究員である河廷龍先生の講演「『朝鮮の美術――典籍と活字』展の鑑賞と解説」ということで、展示ケースを廻りながら、先生から活字や年代順に配列された朝鮮本について、一冊ずつ丁寧な説明をしていただいた。

グーテンベルクの金属活字より古い時代、1377年に白雲和尚景閑が著した世界最古の金属活字本である『佛祖直指心体要節』の影印本をはじめ、朝鮮本が刊行年・活字製作年順に展示されていたので、活字の形態や、変遷経緯がわかりやすかったように思う。書物に刷られた活字体の多様さに驚かされると同時に、この多様性は、鉄、銅、竹、瓢箪などの活字材料の影響も受けているのかも知れないなどと興味深く思った。竹や瓢箪などの活字の種類を見分ける方法は、水の中に入れると、瓢箪は軽いので浮き上がるので見分けが付くことなど、河先生の企業秘密も教えていただいた。

近畿大学が出展した『木活字植字盤』は、組版時に植字盤に付着材を入れて、活字駒を植えていく形態のものであるが、付着材として蜜蝋を使用した形跡が残っている。この植字盤は族譜（家・一族の系図）を印刷するためのものであった。族譜に自分の名前の記載がないと一族とは認められなくなるので、族譜は重要なものであった。

活字駒を詰めた籠を背負って、印刷職人が両班や町村の家々を訪れ書物や族譜などの印刷をおこなったということであった。このような地道な行動が文化発展への源流になったのだと、当時の人々の営みや文化の深さに感じ入った。

高麗美術館は、不思議な時間と空間を感じることができる場所だった。普段の展示状況はわからないが、今回は一階が企画展示、二

階が家具調度、工芸品の展示になっていて、李朝の箪笥や、両班の家、部屋の様子など配分よく置かれ、この建物だけがゆったりと時間が止まったようなくつろぎの場であった。

小さな活字駒が、深い思想や文化の担い手となっていることを知ることができた貴重な一日であった。

8月23日(水) 午後　近畿大学中央図書館

高麗美術館の方が大きな桐箱を二人がかりで運びながら、近畿大学中央図書館に来館された。『木活字植字盤』と『竹活字』は貴重書室の書架に戻された。

近畿大学中央図書館所蔵品が多くの方々の目にふれ、研究に役立てていただけることを、嬉しく思う。

近畿大学中央図書館蔵
朝鮮時代木活字植字盤（19世紀）